
ホントの理由

流羽奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホントの理由

【Nコード】

N4459H

【作者名】

流羽奈

【あらすじ】

海水浴に行った乱菊と日番谷。乱菊の企みは一体？（日×乱…かも？）

照りつける太陽が、真っ白な砂浜を照らしている。あたしは、その砂浜をつま先で踏みながらすこし大きめのつばがついた麦藁帽子をかぶっていた。真っ青な蒼が、ザザーン、と音を立てて、引いては押し寄せ、押し寄せは引いて行く。

やっとの思いで日陰にたどり着き、あたしは、海の家で座敷で呑気に座り込んでいた隊長に言う。

「隊長、氷出してください！」

「氷い？ 何でそんなもん出さなきゃならねんだよ」

あたしは思う。なんでこの隊長は毎回こうやって理由を知りたがるんだろう、って。流れに乗って景気よく出してくれても良いのに。減るもんじゃないんだから、なんて事をこの小さくて生意気な隊長に言った日にはあたしはもう無事じゃ済まされないんじゃないだろうか。

「良いじゃないですかぁ」そこは景気よく、ポンポン、と」
「ふざけんな」

何だかんだ言つて、あたしは隊長にけんかを吹っかけるように軽いノリで言う。多分、この後はぐだぐだと説教が続くんだろうな、なんて思いながら。

「こんな暑い中、わざわざこんなトコに来てやったつてのに、更には氷を出せだあ？ お前には隊長への『遠慮』ってもんがねーのか」
ほら、きた。

あたしは予想通りの隊長の怒りっぷりに、思わずくりと笑ってしまふ。それを見た隊長が、怪訝そうに、それから不機嫌そうに、眉間に皺を更に寄せた。

「何笑ってんだ、松本？」

「何って…何でもないですよ、日番谷隊長」

「…なんだよ、気持ち悪いいな。お前、滅多に『日番谷隊長』なんて呼ばねえくせに」

更に怪訝そうに隊長は眉を寄せ、元々座っていた大勢からゴロンと横になってしまった。こうなってしまうては再び動いてしまう事は無いだろう。あたしは、氷を諦め、踵を返した。

…なんちゃって。あたしが簡単に諦めるわけが無いじゃない。

反抗上等！ むしろそれが無くっちゃつまらないわよ。

あたしは隊長の枕元に立つ。

「たーいちょ！ 氷、出して下さいって！」

「うるせーし、しつけー。出さねえって」

床に肘を立てて、力を抜いてひらひらとふられる。

—— 出てけ、って事か…

隊長が何を言いたいのかわからないわけじゃないけど、あたしは食い下がる。氷を貰わなきゃ、あたしの海水浴と言う名の別の目的は盛り上がらない。

そう、それは…

「お願いしますって！ カキ氷で使っんですからっ！」
「はあ？」

何言ってんだよ、なんて言いたげなまなざしを向けられた。あたしを見上げるその翡翠は、とても綺麗で、今にも吸い込まれそうなくらい透き通っていて… なんと言うか、この世に無いくらい『純粹さ』を感じるものだった。

「… お前、こんな馬鹿げた暑さの中わざわざ海まで来たってのに、泳がねえでカキ氷ってどういうことだよ」

「隊長、知ってます？ 水に入る前と後じゃ、入った後の方がお肌が焼けやすいんですよ」

「どーでもいい、んな事は。カキ氷ならその辺で売ってんだろーが、買って来い。金くらい持ってんだろ」

「それがあ…」

あたしは普段よりも少し高めの声でその言葉を放った。

最近はいいい加減、隊長もこの声色を聞くと悪いことが起こるって理解し始めたみたいで、少し身構える。

「お財布、持って来てないんです」

「… てめえ…」

ピキ、と隊長の額に青筋が浮かんた。

直感的に、まずい、とあたしの身体は無意識に後ろへ数歩、引き下がる。

「… 海水浴ってのはただの口実で… 初めからそれが目的かよ…」

恨めしそうに、あたしを横目で睨む隊長は、どこか騙された子供のような幼さを持っていた。

あ、まだ子供だっけ。

「そんなことのためだけにお前は、この海水浴場を結界で隠して、人が来ないようにしてたのか…」

「すごい、隊長！ そんなことまで気付いてたんですかっ！？」

「つたりめーだ！ 上司を馬鹿にすんじゃねーよ」

あたしに怒鳴りつける少し前から、隊長はいつの間にか立ち上がっていた。めんどくさそうにのそのそと歩いて、半ズボンのポケットに突っ込んでいた片手をゆっくりと伸ばす。

小さな銀髪の少年は、その身長に見合わないくらい長い白刃の刀・氷輪丸の柄を握った。

その瞬間に、さっきまで真夏日だった気温が、一気に下がって、冬が間近の秋、みたいな気温に早変わり。あたしは思わず震え上がった。

「霜天に坐せ、氷輪丸」

やけに気の抜けた、もっと悪く言えばめんどくさいからこんなもんでいいだろ、的な声が、あたしの耳に飛び込んでくる。

ピキピキと音が鳴り、あたしの背丈より高い氷の物体が目の前に現れた。

「てきとーに削って食えば？」

「ひどーい、隊長！ そんなこと、レディのあたしにさせるんですかっ！？」

「お前が食いたいつつたんだろ！！ 何でそこまで面倒見なきやなんねーんだッ！！」

あたしは隊長の罵声を物ともせず、さっきまで隊長が寝転がっていた場所を陣取る。

「あーあ、カキ氷まだかなあ」

なんて言いながら、隊長の困りようと怒りよう、それから優しさを見学するのが好きなのは、あたしだけだろうか？

「…後で覚えとけよ…」

声は怒りで震えてはいるけれど、その声にはしっかりと優しさが詰まっていた。

「ほらよ。どーせお前、苺味だろ」

言い方の割りには丁寧に置かれたカキ氷を、あたしは見つめる。

——何で苺味って分かるのよ…。

きちんとスプーンまで添えられてて、準備が良すぎた。

あたしだったら、うっかりスプーン、忘れるだろうなあ…なんて思いながら、カキ氷を口に運ぶ。

予想通り、味は最高だった。

氷輪丸は、こんな時にしか活躍できないんだから、活躍させてあげないと。

「美味しいです！　ありがとうございます、隊長！」
「…うるせ」

照れたように、隊長は顔を隠した。

「たーいちよ」

「なんだよ、おわかりは受け付けねー…」

あたしは、振り向いた隊長の口元にスプーンを近づけ、お決まりの言葉を言う。

「はい、あーん」

…といつても、ほぼ一方的に、押し込んだ感じ。

まだこういう事になれてない辺りは、大人ぶってはいるけどまだまだ子供。

あたしの気持ちなんて、これっぽっちも気付いてないんだろう。

あたしが今回、ここを結界で囲った理由。

それは、別に隊長に氷を出してもらいたかったわけじゃなくて。

ただ、隊長と、二人きりで傍に居たかったから。

それが、ホントの理由。

f i n . . .

（後書き）

初の日×乱小説。

どうでしたかね？

感想貰えると嬉しいです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4459h/>

ホントの理由

2010年10月22日00時39分発行